

新潟大学理学部同窓会

会報

第27号 2026.09.01



エネルギーと環境について — エントロピーとエコロジーの視点から —

理学部同窓会会長
畠 野 弘 通

東日本大震災での原発事故により原子力発電によるエネルギーの是非——脱原発、脱原発依存、原発推進が、大きな社会問題になってきた。エネルギー安全保障やカーボンニュートラルの観点から、国は原発の推進に舵を切っている。エネルギーと環境の問題について、以下に、私見を述べる。

これらを考えるには「エントロピー」と「エコロジー」の概念が重要で、現代は、エネルギー危機というより、エントロピー危機である。エネルギーは姿・形を変え質の低いエネルギーに変わり、エントロピーが常に増大する。経済学者ガルブレイスは「資源の枯渇より廃物の捨て場の方が問題だ」と、既に1975年に指摘している。この世界のあらゆる現象はエントロピーを不可逆的に増大させており、エントロピーの増加を止めることはできない。環境保護対策は、エントロピーの急激な増大を抑える対策であり、エントロピーを捨てる対策でもある。3R運動が展開されているが、本質的にはエコロジー、すなわち生態学の課題であり、自然環境との共存、循環型社会の実現こそが人類が生き続けるための必須条件である。原発の放射性廃棄物は自然環境と共存せず循環もできない——核燃料再処理工場の建設は計画から30年以上経ても実現していない——ので、原発は次世代のエネルギー、例えばアンモニアなどが開発されるま

での「つなぎ」のエネルギーといえる。

科学技術の進展や経済の発展により我々は、便利で快適な生活を手に入れてきた。しかし、エントロピーやエコロジーの面からは、地球は、危機的な状態にある。ツバル国は水没の危機に瀕し、シベリア凍土は融け続けている。原発の放射性廃棄物を含め、産業廃棄物が溜まり続けている。ガルブレイスが指摘したように、地球は、廃熱したり、廃棄したりできずにいる。

利便性や経済成長の追求と環境保全の追求、換言すれば、エントロピーの急激な増大を抑え、エコロジーの課題に、どう立ち向かっていくのか。難題だ。今も教壇に立つ者として、受験指導だけでなく、知的好奇心を喚起し、社会的課題に対して正しい判断のできる学生を育てたい。

今世紀は、「知の世紀」「環境の世紀」といわれている。自然環境と共存できる知の先端技術を活用した新しい産業が不可欠である。「エネルギー効率の向上」、「循環型社会の実現」、「太陽エネルギーの利用」などの分野で、持続可能な社会に貢献できる人材を、これまで以上に育てる必要がある。理工学教育、産業教育の役割は大きい。

エントロピーやエコロジーの視点から、ケニアの環境保護活動家でノーベル平和賞受賞者でもある故マータイ女史の活動にも学びたい。女史は、日本人の美德とされている「もったいない」精神に感銘を受け、「MOTTA I N A I」を世界に広める活動を行った。豊穡の時代だからこそ、清貧の思想、着実な実践が必要である。



理学部の近況

理学部長 高澤 栄一

同窓会の皆様には、日頃より理学部の教育研究に多大なるご理解ならびにご支援を賜り厚く御礼申し上げます。新潟大学では今年2月に牛木辰男学長から染矢俊幸学長に交代し、新たな執行部体制が発足しました。大学を取り巻く環境は大きく変化しており、18歳人口の減少を見据えた教育改革や研究力強化に向けた施策の検討が進められています。そのような中、理学部では基礎科学の土台に立ちつつ、教育・研究の充実と地域・国際社会との連携を一層推進しています。

理学部ではこの3月には181名が卒業し、4月には216名の新生と11名の3年次編入生を迎えました。また、令和4年度から取り組んできた大学の世界展開力強化事業「インド太平洋地域の仮想フィールドを活用した科学人材育成プログラム」は、日本学術振興会の中間評価で最高評価「S」を獲得し、理学部の国際交流と人材育成の成果が高く評価されています。交流校との派遣・受入の学生数は毎年目標値を超えており、理学部の国際交流の活性化に大きく寄与しています。

今年度の大きな話題は、長年の懸案であった理学部A1棟改修事業が令和7年度の政府補正予算に計上され、移転および改修工事が本格的に始まったことで

す。改修後は、サイエンスミュージアムを移転・リニューアルするとともに、同窓生や地域の皆様、企業、学生、教職員が気軽に交流できる共創スペースも整備する予定です。理学部の教育・研究成果を広く発信するとともに、多様な人々が集い、新たな交流や連携が生まれる拠点となることを目指しています。

一方、五十嵐キャンパスでは、ラーニングハブや新学生寮の整備が進められており、学生・教職員・地域・留学生が学び合い交流する新たなキャンパスづくりが進行しています。

理学部では教員数の減少など新たな課題にも直面していますが、教育研究の質を維持・向上させるとともに、地域との共創や次世代の科学人材育成にも積極的に取り組んでいます。公開講座の開講や中高生向けの科学教育プログラムも継続して実施し、自然科学の魅力を広く発信しています。

A1棟改修に伴う移転や教育研究設備の整備には、自己資金による支援も必要となります。同窓生の皆様には、「理学部次世代サイエンス人材育成拠点整備応援基金」へのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

新しく生まれ変わるサイエンスミュージアムと共創スペースが、同窓生の皆様にとっても気軽に立ち寄り、学生や教職員との交流を深めていただける場となることを願っています。今後とも理学部への温かいご支援、ご助言をよろしくお願い申し上げます。

理学部次世代サイエンス人材育成拠点整備応援基金のご寄附のお願い



理学部玄関前から見たA1棟

A1棟改修に係る移転及び附帯設備費、ミュージアムの移転・リニューアル・運営、高大連携事業、国際交流事業、地域交流事業の推進のために、標記基金へのご寄付をお願いしております。募集期間は令和8年12月までとなっておりますので、宜しく願いいたします。

なお、ご寄附の方法は、新潟大学のホームページから標記基金を選び、お申し込みをお願いいたします。

当寄附は税法上の優遇を受けられます。詳しくは新潟大学のホームページをご覧ください。



理学部A棟1階にある現在のサイエンスミュージアム



プログラムだより

数学プログラム

プログラム長 小島 秀雄

令和7年度は学部生39名、博士前期課程20名、博士後期課程3名(9月修了含む)の方が卒業・修了されました。他に1名の方が論文博士として学位を授与されました。

令和8年度より大学院改組のため、数学関係の院生は総合学術研究科(修士課程)自然科学専攻物質創成・基礎科学プログラムの数理科学分野に所属することになります。数理科学分野では1期生として20名の方が入学され、新たなカリキュラムの下で学修・研究を行っています。博士後期課程の改組の準備も進めているところです。自然科学研究科博士後期課程には5名の方が入学(進学)されました。ここ数年数理科学分野の大学院生数が増加しております。学生・院生の受賞については、博士後期課程2年生1名と博士前期課程2年生2名の方が研究関係の賞を受賞されました。数理科学分野の学生と院生の活躍が増えています。

本年4月に原瀬晋先生が新たに准教授として着任しました。原瀬先生のご専門は数理統計学と数値解析です。数学プログラムでは統計分野の専門家が不在となっておりますが、原瀬先生のご着任により、当該分野の教育・研究環境がさらに充実しました。

理学部A1棟の改修に伴い、引っ越しの準備を進めています。数学の洋書と学術雑誌がこの建物にあるのですが、全てを移動することが困難であることが判明し、その対応をする必要があります。

最後に、永年研究と教育面で顕著な業績を挙げた田中環教授が来年3月にご退職される予定です。同窓会数学支部では田中先生の祝賀会を企画しています。詳細は来年度に会報と同窓会のHPで連絡される予定です。興味のある方は同窓会数学支部事務局にお問合せください。



物理学プログラム

プログラム長 浅賀 岳彦

はじめに、物理学プログラムの近況についてご報告申し上げます。2025年度は、38名の学生が物理学プログラムを卒業いたしました。そのうち21名が新潟大学大学院へ、1名が他大学大学院へ進学しました。また今年度、新潟大学大学院の修士課程は、現代社会文化研究科と自然科学研究科が統合され、文理の知を結集した「総合学術研究科」へと生まれ変わりました。

教員の人事異動に関しましては、この春、小池裕司教授が定年退職されました。小池先生は、1994年4月に新潟大学大学院自然科学研究科に助手として着任されて以来、32年の長きにわたり、本学の教育研究に多大な貢献をなさいました。理論物理学、特に摂動的量子色力学を専門とされ、偏極陽子の散乱過程で見られるシングルスピン非対称の起源に関する研究において、世界に先駆け重要な成果を挙げられました。また、大学運営においても、大学院自然科学研究科副研究科長、理学部副学部長、自然科学系数理物質科学系列長、自然科学系副学系長を歴任されるなど、幅広くご尽力いただきました。長きにわたるご貢献に深く感謝申し上げます。一方、この4月からは、大久保毅先生が物性理論グループに准教授として着任されました。今後のご活躍を大いに期待しております。

また、本年6月9日には、恒例のケルビン祭を開催しました。当日は、大学院入試説明会、物理学プログラムの研究グループ紹介、学生対話集会を行いました。さらに、理学部棟前の駐車場にてバーベキュー大会を行い、学生・教員相互の親睦を深めました。

ケルビン祭の重要な行事として、物理学科卒業生の寄付金をもとにした「中山賞」、同窓会物理支部のご支援による「同窓会奨励賞」および「同窓会新人奨励賞」の授賞式を行いました。成績優秀な4年生6名および3年生4名に対し、各賞を授与しました。受賞者にとって、残りの在学期間だけでなく、卒業後においても大いに励みとなることと思います。同窓会の皆様には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

大学院修士課程が改組され、今後は博士課程の改組も予定されております。新しい大学院においても、物理学プログラムの卒業生が一層活躍できるよう、教員一同、教育・研究にさらに努めてまいります。同窓会の皆様におかれましては、引き続き温かいご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

化学プログラム

プログラム長 梅林 泰宏

令和7年度の化学プログラムは、推薦入学8名とFSP採択7名の1年生、1名の3年次編入生を新たなメンバーに加え、後期には36名の2年生が化学プログラムに配属されました。また、37名の学部学生と20名の修士学生が卒業・修了し、社会に巣立っていきました。また、令和7年度化学プログラム4年生のWANG Yuchuanさん、中野敦斗さん、本田 龍聖さんの3名が学業成績優秀者として表彰されました。本表彰事業は、同窓会にご支援いただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

研究活動も活発に行われています。物理化学分野では、低エネルギー光子を高エネルギー光子に変換する逐次反応系における中間体が、分子内で周期的な励起子ホッピング運動を起こすことを明らかにしました。加えて、



ホッピング速度が光の光子エネルギー変換効率に重要な役割を果たしていることを示しました。この成果は、Q1ジャーナルにAngew. Chem. Int. Ed.誌に掲載されました。(DOI: 10.1002/anie.202503846) また、有機分野では、ポルフィリン環の部分骨格であるピロール環が他の芳香環で置き換えられた核置換ジアザポルフィリンを対象とした研究が進みました。天然のポルフィリンでは取り扱いえないラジカルや反芳香族化合物等の不安定化学種が、外周部の化学修飾や中心金属の導入により大幅に安定化され、未開拓のこれら化学種の光物性、電気化学特性、反応性等の解明につながりました。この成果は、Q1ジャーナルOrganic Letters誌に掲載されました。(DOI: 10.1021/acs.orglett.5c02644) また、関連して第13回ポルフィリン・フタロシアニン国際会議) など過去3年間の国際会議で3回の招待講演が行われました。

生物学プログラム

プログラム長 酒井 達也

生物学プログラムでは、2026年3月に学部卒業生20名、大学院博士前期課程修了生14名、後期課程修了生1名を送りだしました。植物生理学分野を担当していた岩崎俊介准教授も令和7年度末に定年を迎え、ご退職なされました。これにより、生物学プログラムを主担当とする教員数は教授4名、准教授5名、スイングバイ助教1名、合計10名となりました。令和8年度に迎えた新入生のうち、生物学プログラムへの推薦入学者は5名、Frontier Study Project (FSP)の学生は3名でした。令和8年度生物学プログラムに配属している4年生は25名(10月卒業予定者1名を含む)、3年生は23名(5名の過年度生、1名の3年次編入生を含む)です。およそ例年通りの人数が生物学プログラムを選択し、専門科目を学んでいます。ただ最近過年度生が増える傾向が現れ始め、注視しております。

大学院は改組が行われ、農工理をまとめた自然科学研究科から文系を含む五十嵐キャンパス全体を一つにまとめた総合学術研究科となりました。自然科学研究科生命・食料科学専攻基礎生命科学コースを形成していた我々は、改組後には自然科学専攻生命環境・食料科学プログラム基礎生命科学分野となり、農学部・創生学部教員とより密接に関わりながら大学院教育を行ってまいります。本分野前期課程1年生は12名(生物学プログラム学部卒業生10名の進学者を含む)が所属しています。これも例年通りの進学率及び所属人数になります。また自然科

学研究科前期課程修了生のうち1名が基礎生命科学コース(旧カリキュラム)博士後期課程へ進学しました。

生物学プログラムにおけるイベントは今年4月に大教室でのお弁当を食べながら話す新入生・編入生との懇談会、昨年9月末に生協食堂にて立食形式での夏の懇談会を例年通り開催しました。新型コロナウイルスによって失ってしまった懇談会文化に学生が戸惑う様子もありますが、同学生年や学年をまたぐ学生間の交流ができる場を今後も維持していきたいと考えています。生物学はサイエンス・テクノロジーとしての経済的側面がありますが、理学部においては「生命/生きる/人とはなにか」を問い学び、個人の人生や社会を豊かにする哲学的側面もあります。ここで学び巣立っていく学生の人生が豊かになるように、教員一同引き続き努力してまいります。同窓会の皆様におかれましては、今後とも温かいご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。



地質科学プログラム

プログラム長 栗原 敏之

地質科学プログラムでは、2026年3月に15名の卒業生を送り出し、このうち13名がJABEE認定の「地質エンジニアリングコース」を修了しました。卒業生は、6名が今年4月に新設された総合学術研究科へ進学し、理科教員(1名)、県職員(総合土木職、2名)、建設コンサルタント(3名)などに就職しました。博士前期課程では7名が修了し、博士後期課程への進学(3名)のほか、資源系企業(3名)、建設コンサルタント(1名)へと進みました。いずれも、学部から大学院までの教育を通じて培った専門知識、とくにJABEE認定コースを通じて育成してきた実践的な能力が、卒業後の進路選択にも着実に反映されているものと考えてい



ます。

また、地質科学プログラムでは、例年、学生の配属人数の確保が継続的な課題となっていました。今年度は期待のもてる動きが見られ、6月から始まった「理学基礎演習(地質科学プログラム)」では25名が履修しています。野外での観察や地層・岩石を題材とした演習を通して、地質学の面白さに触れ、来年度以降のプログラム選択につながっていくことを願っています。

今年で5年目を迎える大学の世界展開力強化事業による国際交流も、当プログラムにとって重要な取り組みです。昨年12月にはインドに11名、今年3月にはオーストラリアに7名が派遣され、現地でのフィールド実習や交流を通して、地質学を国際的な視野から学びました。また、この事業を契機として大学院における留学生の受け入れも広がっており、今年10月には地質学分野に6名の国費留学生を迎える予定です。学生の派遣と受け入れを通じて、教育・研究の国際化が着実に進んでいます。

10月の大学祭では、例年どおり自主ゼミによる展示、「秘酔」に加え、卒業生と在学生・教員が交流する集いも予定されています。卒業生の皆さまにも、ぜひ足をお運びいただければ幸いです。今後も、地質科学プログラムの魅力をさらに高めながら、教育・研究の発展に努めてまいりますので、引き続き温かいご支援をお願い申し上げます。



自然環境科学プログラム

プログラム長 宮崎 勝巳

自然環境科学プログラムでは、2025年度は21名の卒業生を送り出しました。12名が大学院に進学、県内外の民間企業への就職4名、公務員就職3名、その他2名の内訳です。具体的な進学・就職先については、例年通り理学部ホームページのメニューから、就職・進学支援→卒業生の進路→自然環境科学プログラム、とお進み下さい。自然環境科学プログラムでの学びを、今後様々な場面で大いに活かしてくれるものと期待しています。

昨年度、自然環境科学プログラムへの新規配属学生数は17名で、これまでの最少人数(12名)だった前年度から、やや回復しました。12月10日に恒例の学生対話集会を開催し、その日の夕刻より、3年生が主催する1・2年生歓迎会を生協第三食堂で行われましたが、お陰様で学生の先輩・後輩間、また教員・学生間で、有意義な交流が展開されました。また今年4月には、三年次編入生1

名が新たに加わりました。

また昨年度末には、白井聡准教授がめでたく定年退職を迎えられました。先生は1996年に自然環境科学科講師として着任され、以来30年の長きににわたり、自然環境科学科そしてプログラムを様々な側面から陰日向に支えていただきました。今年1月28日には、「有機化学反応機構の研究から学んだことー若い世代に託してー」の演題で最終講義を行っていただき、3月28日には、学科同窓会(創環会)主催の送別会を開催しました(写真)。どちらのイベントにも多くの関係者が集い、その中には先生の研究室の卒業生も相当数含まれ、先生との懐かしい会話を大いに楽しませていました。我々自然環境科学プログラム教職員としましては、先生のこれまでの多大なるご貢献に大いに感謝すると共に、今後のご健康と益々のご健勝とを、同窓会メンバーと共に心よりお祈り申し上げたいと思います。



フィールド科学人材育成プログラム

プログラム長 本田 明治

当プログラムでは2026年3月に11名(農学部と合わせると24名)の卒業生を第6期生として送り出しました。接続する大学院フィールド科学コースからは、博士前期課程修了者14名を送り出しています。2026年4月からは4年生11名(農学部と合わせると22名)が各研究室に配属されました。また、新規に開設された総合学術研究科修士課程には28名、自然科学研究科博士後期課程には4名が進学しています。大学院コースは他プログラム、他大学からの進学が引き続き好調です。

2026年4月、当プログラムに小山偲歩助教が着任されました。小山先生の専門は、海鳥やウミガメなどの野生動物を対象とした行動生態学および生理生態学で、栗島が主要なフィールドです。GPSなどの小型記録装置を用いたバイオリギングや生理指標の測定を通して、環境変動が動物の行動や体の状態に与える影響の解明に取り組んでいます。変化する環境に動物がどのように応答しているのか、その仕組みの解明が今後期待されます。

毎年のフィールドナビは6月9日に附属図書館で開催しました。本学の特色でもある、多様な自然フィールドを対象とする30以上の研究室が参加して研究活動を紹介するイベントで、当プログラムが開設された2017年以来継続実施され今回で10回目となりました。対象は主に理学部・農学部1～3年生で、当プログラムへの配属を考

える学生、既に当プログラム配属済で所属研究室を探す学生など約100名が参加しました。終了後の懇親会はこちらも恒例となった野外バーベキュー形式を農学部中庭で実施、ジビエも振舞われるなど充実の一日となりました。

2026年度で当プログラムも10年目を迎えました。この間理学部主担当教員は4名から7名となり、今年度の2年生から受入れ人数の上限も12名から20名と大きく増加し、今後さらなる発展が期待されます。



コラム 旭町学術資料展示館に理学部の植物標本を展示しました

新潟大学旭町学術資料展示館の常設展示の改装に伴い、2026年4月より、理学部および教育学部で保管されてきた植物標本の一部を展示しています(図1)。

植物標本(さく葉標本)は、採集した植物を乾燥させて台紙に貼り、採集地、採集日、採集者などの情報とともに保存したものです。ある時代、ある場所に生育



図1：旭町学術資料展示館での植物標本の展示の様子。

していた植物を後世に伝える「自然の記録」であり、植物の分類や分布、環境変化の研究に利用されます。生物学科や自然環境科学科を卒業された皆様には、野外実習で植物を採集し、新聞紙にはさんで標本を作った経験を懐かしく思い出される方もおられるのではないのでしょうか。

展示では、理学部生物学科第一講座の教授を務められた野田光蔵先生の海藻標本(図2)と、自然環境科学科教授であった石澤進先生の植物標本の一部をご覧ください。野田先生の手紙の海藻標本のうち約1,000点は、2022年に新潟大学植物標本庫へ移管されました。新種

志賀 隆 (自然環境科学科卒)

などの基準となった模式標本も数多く含む、植物分類学・藻類学上きわめて貴重なコレクションです。展示スペースはわずかですが、ぜひ旭町学術資料展示館(〒951-8512 新潟市中央区旭町通2番町746、火～土曜日開館)へ足をお運びください。

新潟大学植物標本庫は教育学部内にあり、自然環境科学科卒業生で、現在は教育学部教員の志賀が管理しています。野田先生の海藻標本をはじめ、かつて理学部生物学科第一講座で管理されていた標本の一部も収蔵しています。一方、関係教員の退職などに伴い、理学部にあった標本のほぼすべては学外へ移されています。大学が蓄積してきた標本を散逸させず、将来は学内で一体的に管理できる体制を整えたいと考えています。

新潟大学植物標本庫では、植物標本の整理・保存と教育・研究への活用を支えるご寄付、ご協力を随時受け付けています。関心をお持ちの方は、志賀(shiga@ed.niigata-u.ac.jp)まで是非ご連絡ください。



図2：ウスバヤハズ
Dictyopteris punctata
sp. nov. Nodaの模式標本
(野田光蔵, 1971年9月14日採集)。

全学同窓会からのお知らせ (今年度の交流会について)

新潟大学全学同窓会では下記内容で令和8年度新潟大学・全学同窓会交流会記念講演会を実施いたします。

日時：令和8年10月17日(土) 15:00～16:10

会場：新潟大学五十嵐中央図書館「OMNライブラリーホール」

演題：SIP海洋プログラムの進捗について～南鳥島レアアース国産資源の実現に向けて～

講師：内閣府戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)・「海洋安全保障プラットフォームの構築」プログラムディレクター
日本CCS調査株式会社 顧問 石井 正一氏

※講演会終了後17:15～18:45に懇親会も予定されております。

なお、申し込み等詳細につきましては新潟大学全学同窓会のホームページを確認し、全学同窓会事務局にお問い合わせ・参加申し込みをしてください。

全学同窓会事務局：電話 025-262-7891

Eメール dosojimu@adm.niigata-u.ac.jp

支部だより

数学科

支部長 轡田 勝祐

「数学教室ホームカミングデー」をご紹介します。数学プログラムと共催し、10月開催の「新潟大学WeeK」の期間中に行っています。同窓の皆さんのお話をお聴きする講演会です。参加者は数学科支部会員はじめ、新潟大学の学生さんなどで、特に参加条件は決めていません。理学部棟で旧友を温める機会ともなればという思いです。

- ・昨年度(令7.10.25(土))に開催は、厚生労働省青森労働局長 角井伸一さん(平3.3卒)、新潟県教育庁教育次長 小川正樹さん(昭63.3卒)から講演いただきました。
- ・本年度(令8.10.24(土))に開催予定は、会報に同封している開催案内のとおり、同じ卒業クラス(昭59.3卒)の大阪大学大学院理学研究科教授 渡部隆夫さん、秋田県教育委員会教育長 安田浩幸さんによる講演です。ぜひご参加ください。

なお、直近に開催した支部の会合をお知らせします。役員会(令8.2.14.4.25)をオンラインで行い、新役員体制、前年度決算・事業内容、本年度予算・事業計画などを了承いただき、同窓会役員会(5.9)で報告しました。また、同窓会代議員会(6.20)の当日に数学科支部幹事・代議員会(出席者：10人)を行いました。数学科支部に係るお知らせや報告は、数学科支部HPに掲載しています。「新潟大学理学部同窓会数学科支部」でご検索ください。

物理学科

支部長 麿沢 祐一

物理支部は、例年通りの活動をしてまいりました。その中でも、できるだけ理学部物理学プログラムの学生を支援する活動ができないかと考えてまいりました。

今年も、6月9日(火)のケルビン祭で学生を表彰する際に、4年生の成績優秀者の学生3人に物理学科同窓会奨励賞の副賞としてそれぞれ1万円の図書カードを贈呈し、他に同窓会新人奨励賞として5千円の図書カードを4人に贈呈しました。

このような活動をきっかけに学生の皆様と触れ合う機会が増えることにより、交流も盛んになるのではと思っています。継続している次第であります。

今後ともご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

化学科

支部長 田邊 薫

私事ですが、昨年秋に同期会を一泊二日で実施し、同期の半数弱が参加しました。卒業から42年、前回からも随分年数が経っていましたが、学生時代の気安さに戻り思い出話や近況報告などに花が咲きました。皆が元気なうちにもう一回くらいは、と思っています。

さて、昨年度の支部事業ですが、支部総会のほか、化学プログラム支援として化学プログラム学生表彰支援事業を実施しました。6月の支部総会では、畠野前支部長

の理学部同窓会長就任に伴う支部長退任があり、後任として田邊が新支部長となりました。3月の化学プログラム学生表彰支援事業では、化学プログラム4年生の成績優秀者3名に対し、表彰状とともに賞金を授与しました。この事業は畠野前支部長の元、一昨年度から実施し、昨年度で2回目の実施です。今後も継続的に実施していく予定です。

また、今年度の支部事業ですが、化学プログラム学生表彰支援事業に加え、同窓生同士の交流を後押しする事業として同期会等支援事業を実施する予定です。内容は通信事務経費等の補助です。詳細については、化学科支部のWebページに掲載しますので、理学部同窓会Webページ(QRコード①)の「各支部の活動」から、「化学科支部」でご覧ください。本事業が、同窓生交流の一助となれば幸いです。



(QRコード①)

新規事業は引き続き募っています。ご要望やお問い合わせ、ご相談は学部同窓会経由でお願いします。

今後も支部活動へのご支援、ご協力をお願い申し上げます。

生物学科

支部長 藤原 昌晴

理学部同窓会生物学科支部では、会員相互の交流促進と学科との連携強化を目的として、継続的に活動を行っています。

今年度は新たに代議員を迎え、若い世代の参加によって支部活動にも新しい活力が加わりました。今後は世代を超えた交流をさらに深め、卒業生ネットワークの充実を図ってまいります。

また、このたび理学部同窓会ホームページ内に、生物学科支部の専用ページが新設されました。活動報告や行事案内などを掲載し、会員への情報発信をより充実させていく予定です。

さらに、在学生支援や卒業生との交流の機会づくりにも取り組み、学科とのつながりを大切にした活動を進めていきたいと思っています。

地質科学科

支部長 豊島 剛志

本支部が支援して、2025年10月18日～10月19日に新潟大学WeeK2025の「地質まつり」と「地質科学プログラムの未来に向けて：卒業生と在校生の集い(第1部・第2部)」が、新潟大学理学部同窓会支部事業補助費補助対象事業として実施されました。「地質まつり」には1,000名を超える参加者が、「集い(第1部)」にも50名を超える参加者がありました。「集い(第1部)」では地質学を活かして社会で活躍している若手の卒業生3名の講演だけでなく、ポスター発表会が行われました。これらを通じ、卒業生・在校生・教員だけでなく市民の方々との交流が対面

で深められました。さらに、「集い(第2部)」も開催され、在校生および卒業生の研究や仕事などについて深い交流が図られました。

地質科学科支部の役員にも複数名の若手が加わり、徐々に世代交代が図られつつあります。しかし、長らく新年会など、支部内の懇親を深める機会が行われていませんので、今後、その機会を設ける必要があるでしょう。

2026年度の集中講義「土地地質学」は、昭和60年度卒の大河内誠氏(NPO法人ジオプロジェクト新潟 事務局長)が担当し、対面授業を行う予定となっています。

「野外地質調査・野外調査に基づく研究なら、新潟大学理学部の地質」と言われる伝統が続くよう、当支部はこれからも教室への協力を続けていきます。



自然環境科学科

支部長 尾原 祥弘

日頃より、同窓会の活動にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。同窓生の皆様におかれましては、それぞれの立場で、家庭や職場などにおいて様々な

役割を担い、日々ご活躍のことと存じます。

さて、昨年度の事業についてご報告いたします。昨年度は、10月25日(土)に総会および懇親会を開催しました。大学の先生方2名にもご参加いただき、計9名で親睦を深めることができました。今後、学生を支援していくために、自然環境プログラムの先生方との連携を深めていきたいと考えていたところ、ご参加いただくことができ、大変ありがたく存じます。

また、昨年度、長年にわたり学科・プログラムの教育と研究を支えてこられ、創環会の同窓会活動にも協力下さっていた臼井先生がご退官されました。最終講義を兼ねて1月に行われた理学部コロキウム、ならびに3月末に開催されたお祝いの会について、メールやInstagramでご案内しました。お祝いの会には、臼井研究室のOB・OGを中心に25名が参加しました。

今年度の総会および懇親会も、大学の先生方をお招きして開催したいと考えています。詳細につきましては、9月に送付される資料をご覧ください。予定が決まり次第、Instagramでもお知らせします。

首都圏同窓会

と私

理学部首都圏同窓会の現況

首都圏支部長 安藤 勝利

日頃より首都圏同窓会の活動に温かいご支援を頂き感謝しております。

昨年は、10月26日に理学部首都圏支部が幹事となり、全学首都圏同窓会を東京新潟県人会館(台東区上野)において、牛木学長、高澤理学部長のご出席をいただき、国立科学博物館の神澤研究主幹の「古人骨ゲノムから見た日本列島人の形成史」として古代人骨のDNA分析を通して興味深いご講演を頂きました。会場には久しぶりに50数名の同窓生が集い盛会に開催できました。

今年は6月27日に第38回新潟大学理学部首都圏同窓会を東京新潟県人会館で開催する予定でしたが、直前に台風が同時に2個、関東を直撃することとなり、講演者や出席者の安全を考え急遽中止することとしました。このため財政的にもかなりの痛手を受けました。

また、首都圏同窓会のPR活動として、毎年紹介リーフレットを編集作製しています。3月には理学部卒業生一同に配布し、9月頃に首都圏在住の理学部同窓会会員に配布しております。夏には全学首都圏同窓会の納涼会が開催され、理学部首都圏同窓会も参加し交流を図っています。

毎年、同窓会総会に先立ち開催されるサイエンスセミナーは、各

学科の幹事が持ち回りで理学部を卒業され各分野で活躍されている方々に講師をお願いし、話題を提供していただいております。また大学からは、理学部長より学部の現状の話題を、各学科の先生には興味ある話題を提供していただいております。

同窓生の皆様におかれましては、ぜひ同窓会総会に先立ち開催されますサイエンスセミナーで新しい知見に触れつつ、総会後の懇親会等で新たな交流や旧交を温めるなど、奮ってご参加下さいますようお願い申し上げます。

今後も、首都圏同窓会の活性化に向け取り組んでいきたいと考えておりますので、一層のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。



若手卒業生から（実社会に出て）

数学プログラム

2022年卒 笹川 理湖

数学プログラムを卒業し、自然科学研究科を修了後、現在は新潟県で数学教諭として勤めています。大学時代は、数学プログラムの諸先生方や仲間にも恵まれ、数学の専門性を大きく高めることができました。現在、日々の授業や生徒との関わりの中で、その価値を強く実感しています。授業では公式の暗記にとどまらず、背景にある考え方を伝えるように心掛けています。授業を通して、生徒が主体的に学ぶ姿を見れた時はとても嬉しく、教員としてのやりがいを強く感じます。

大学時代に培った数学の専門性は、今の私の指導の根幹であり、大きな支えになっています。今後も学び続ける姿勢を忘れず、生徒にとって学びの多い授業を目指して精進していきます。



より効率よく造るための仕事」をしています。銅板、設備、検査など幅広い知識が必要となり、2年目の今も勉強の毎日、部活と研究三昧だった日々がもう懐かしいです。学生時代の研究テーマとはまったく異なる分野の職に就いていますが、あの時があったからこそ今の仕事に向き合えていると思っています。研究所所属時代に「木ばかり見ていないで森を見ろ」とよく言われていました。今でも細かいことを気にしてしまい、視野が狭くなった時はこの言葉を思い出しています。自分の弱点を克服するのはなかなか難しいですが、意識し続けることで少しずつ成長できていると感じています。これまでいただいた多くのことを自分の糧とし、いちエンジニアとして一人前になれるよう精進していきます。



物理学プログラム

2023年卒 金子 将大



現在、半導体の基盤となるシリコンウェーハを製造する会社で、品質向上に関わる仕事をしています。ウェーハ表面に生じるわずかな異常について、実際に装置を扱う方々の話を伺いながら原因を調べ、データ解析やAI、シミュレーションなどを活用して改善につなげています。入社1年目からプロジェクトに参加し、課題の整理から仕組みづくりまで携わる機会をいただき、日々多くのことを学んでいます。

大学では、物理の知識が企業でこれほど活かされるとは想像していませんでした。仕事では、データを眺めるだけでは答えは見つかりません。その数字の背景でどのような物理・化学現象が起きているのかを考えることで、初めて原因や改善の方向性が見えてきます。数式の意味を一つひとつ考える姿勢や、「なぜそうなるのか」を追究する習慣は、学生時代に身に付けた大切な財産です。これからも理学部で学んだ基礎を大切にしながら、より良いものづくりに貢献していきたいと思っています。

大学では、物理の知識が企業でこれほど活かされるとは想像していませんでした。仕事では、データを眺めるだけでは答えは見つかりません。その数字の背景でどのような物理・化学現象が起きているのかを考えることで、初めて原因や改善の方向性が見えてきます。数式の意味を一つひとつ考える姿勢や、「なぜそうなるのか」を追究する習慣は、学生時代に身に付けた大切な財産です。これから理学部で学んだ基礎を大切にしながら、より良いものづくりに貢献していきたいと思っています。

生物プログラム

2023年卒 松 賢吾



自然科学研究科を卒業後、医薬品メーカーの研究開発部門に所属し、試験グループの一員として業務に携わっています。国が定める法律やガイドラインに従いながら、医薬品の申請に必要なデータ取得など責任ある業務を担当し、日々やりがいと責任の大きさを感じています。大学での研究室での活動を通じて、課題の本質を考える力や粘り強く取り組む姿勢を培うことができました。これらの経験が、正確性と信頼性が求められる現在の業務において大きな支えになっていると実感しています。まだ、社会人としては経験の浅い立場ですが、学生時代に支えてくださった方たちへの感謝を忘れず精進していく所存です。

大学での研究室での活動を通じて、課題の本質を考える力や粘り強く取り組む姿勢を培うことができました。これらの経験が、正確性と信頼性が求められる現在の業務において大きな支えになっていると実感しています。まだ、社会人としては経験の浅い立場ですが、学生時代に支えてくださった方たちへの感謝を忘れず精進していく所存です。

地質科学プログラム

2024年卒 西郷 翔

自然科学研究科を卒業したのち、研究職として化学メーカーに勤めています。学生時代とは違う分野での研究となるため、わからないことが多いのですが、できないことができるようになるたびにやりがいを感じております。

現在、環境問題が深刻化し世界ではカーボンニュートラル社会実現に向けて様々な取り組みがなされています。私はあらゆる産業の基盤である化学の力によりこの問題を解決していきたいと考えてい



化学科

2023年卒 大谷 恵理香

2025年に自然科学研究科を修了し、現在は鉄鋼メーカーに勤務しています。職場にあるトイレトーパーのように巻かれた銅板が皆さんが運転する車になっています。日々の業務としては「より良い商品を

ます。そのため、日々の研究では自身の技術や知見が社会へどう貢献し、どのような価値を生むかを常に意識して研究に臨むことを大切にしたいです。今後は、これまで大学で培った経験を通じて持続可能な社会の実現に貢献できるよう、挑戦し続けてまいります。

自然環境科学科

2022年卒 戸田(丸山) 真穂



私は2024年に自然科学研究科を修了しました。現在は、農林水産省横浜植物防疫所で、植物防疫官として検疫業務に従事しています。

植物防疫所は、海外からの病害虫の侵入・蔓延を防ぐため、輸入植物の検疫等を行っています。私は、昨年度までは東京港で、今年度からは成田空港で、輸入貨物の検査にあたっています。両港とも国内最大級の貨物取扱量を誇ります。目まぐるしく過ぎていく日々ですが、自然環境科学プログラムで学んだ植物や昆虫に関する知識を業務に活かすことができ、とても充実しています。将来は、病害虫の生態に関する調査研究にも携わりたいと考えています。

近年の気候変動に伴い、国内への病害虫侵入リスクは増加しています。学んだ知識を活かしながら、日本の農業と自然を守るために尽力していきたいです。

フィールド科学人材育成プログラム

2018年卒 有江 賢志朗



私は2023年3月に博士課程修了後、JAXA地球観測研究センターのポスドク研究員を経て、現在は研究開発員(任期なし)として勤務しています。現職では、「だいち」シリーズなどの衛星データ利用研究や次期衛星ミッションの立ち上げに携わっています。衛星

データを検証するため、グリーンランド氷床のほか、研究室の後輩たちとキルギスタンの氷河で調査を実施しました。学生時代は、日本の氷河の存在確認や維持メカニズムの解明に取り組みました。国内外のフィールドワークや研究者との議論を通じて、自身の研究を発展させるとともに、地球観測衛星の未来に貢献できるやりがいを感じています。今後も衛星地球観測を通じ、社会に貢献していきたいです。

理学部同窓会特別会費 納入者御芳名(敬称略)

令和7年7月～令和8年6月

● 数学科支部

菊部 富雄	山口 真理	渡辺 和彦	浅野 裕司
久志本 茂	伊東 孝芳	城塚 敏道	中原 健二
佐藤 英男	日比登史男	玉木 正己	関野 文瀬
堀 行	遠藤 利光	富田 保宏	伊藤真知子
樋浦 卓嘉	吉成 毅	田中 環	大竹 昌弘
石田 健市	原 幸仁	佐藤 浩一	斎藤 裕
金子 正義	青木 孝史	鈴木 勇二	島貫 光
水谷 浩	鈴木紀美子	清水美和子	信太みのり
吉田 輝雄	竹内 正文	中井 良	安齋 真由
金城 義行	勝祐	小川 正樹	
永井 健樹	飯田 昭男	上川 芳浩	
井村 悦子	大塚 英雄	角井 伸一	
石田 雅義	細野 晃	牛丸 智博	
八木 文雄	丸山 善久	小山 尚之	
本間 久	風巻 利夫	笠原 宏文	

● 化学科支部

梅澤 貞雄	畠野 弘通	青柳 義昭	橋本 一人
長尾 典	坂本 憲司	滝沢 貞親	板垣 健
佐藤 ヒサ	福島 幹雄	三ツ寄敏雄	市野 正廣
佐藤 茂司	藤田みさお	森田 朗	齋藤 雅志
塩畑 ツネ	内山 昭博	松尾 和浩	久成 雅志
半田 進	小川 茂樹	三上 正人	吉田 勝美
吉川 義雄	東田 良和	飯田 英典	片山 肇
小林 和雄	本間 悟	岩崎 匡臣	白井 洋平
渋谷 貞雄	百瀬 泰紀	松田 高至	中田 克
間 和彦	和史	斎藤 博之	長谷川太一
殿内 重政	羽深 等	佐藤 友美	新関 達也
土屋真知子	村山 茂子	田澤 滋樹	真野 文徳
浅井 恒雄	石田 秀一	石山 友英	鈴木 凱
川村 鉦次	高橋 邦明	金子 洋介	刀祢 若奈

● 自然環境科学科支部

一海 敬有 姫田 丞 宮崎 頌子

● 物理学科支部

森山 久夫	寺前 直子	鈴木 俊男	水谷 先宏	菅野 義博
畑野 清司	藤島隆一郎	水谷 洋二	板垣 和宏	玉木 駿佑
小林 一男	渡辺 俊英	石川富二男	水島 清彦	今井 渉
丸山 敬	白川 保憲	長崎 健二	山田 徳昭	佐藤 佑哉
小川 稔	八木 隆志	有馬 敏幸	黒澤 昌基	樋山 舜崇
高橋 進	青柳 秀一	白鳥 明彦	田中みちる	小玉 陽平
本間 正宜	上林 俊一	森 定男	山崎美穂子	
橋本 俊彦	佐藤 三男	武田 勝利	十文字伸哉	
村山 重雄	岩澤 健二	山岸 靖宏	越後 弥大	
山口 喜啓	渋谷 孝雄	武井 早憲	吉田 信介	

● 生物学科支部

島田 隆道	荒木 勉	佐藤 克美	久保 隆之	門脇 康之
伊東 和江	大村 康夫	富永 弘	市川 克行	木村 太郎
小林 道頼	長谷川英男	信田 庸二	猪熊 正則	長谷川直紀
兒島 英介	箕輪 正和	池田 雄二	頓所 裕史	
大滝 照成	林 正栄	伊藤 達朗	佐々木 哲	
能勢 陽子	藤井 保	笹川 通博	榎本喜美子	

● 地質科学科支部

倉又 孝夫	松波 武雄	飯野 芳則	田中 力	八木 郁恵
大西 淳	小村 寿夫	清水 功	小林 公一	海野万葉香
塚田信一郎	岡田 正明	武田 茂典	佐藤 壽則	阿彦 貴之
山岸 俊男	佐々木 正	稲葉 充	渡部 直喜	長谷川千博
石橋 輝樹	二瓶 文雄	五十嵐 聡	佐久間 幹	山崎 晴香
加藤 靖夫	山田 守	大和田正明	小島 玄生	長谷川舞帆
高見 健	笹川 一郎	北脇 裕士	関根 正道	小坂 はる
徳間 正一	佐藤 和平	滝本 俊明	竹内 均	
山野井 徹	伊豫田成子	大河内 誠	田利信二郎	
吉田 滋	藤原 徹	佐藤 陽一	中澤 健太	
鈴木 国昭	中水 勝	柿崎 聡	中村香代子	

● 旧職員

石塚 紀夫 徳江 郁雄 中田 のり 長谷川美行 渡部 剛

表1

2025年度 理学部同窓会決算

一般会計

	費 目	予算額(A)	決算額(B)	比較(B-A)	説 明
収入の部	終 身 会 費 ・ 寄 付 金	5,000,000	4,708,000	-292,000	
	終 身 会 費	4,000,000	3,820,000	-180,000	新入生 191名×20,000円
	特別会費・寄付金等	1,000,000	888,000	-112,000	ゆうちょダイレクトは209名、らくるカート38名
	他 会 計 繰 入 金		0	0	
	雑 収 入	88,817	137,843	49,026	預貯金利息、全学同窓会資料会員配送費清算(62,902円)
	前 年 度 繰 越 金	1,146,789	1,146,789	0	現金、第四北越銀行普通預金、ゆうちょ通常貯金、ゆうちょ振替貯金
	収 入 合 計	6,235,606	5,992,632	-242,974	
支出の部	会 議 費	175,000	113,980	-61,020	諸会議交通費、会場費
	広 報 費	2,160,000	2,129,590	-30,410	
	「会報」発行費用	400,000	398,290	-1,710	理学部同窓会誌「会報26号」(7,700部)印刷代
	「理学部は今」発行費用	550,000	558,140	8,140	理学部機関誌「理学部は今」(7,500部)費用分担
	会員宛資料配送費	1,200,000	1,166,061	-33,939	7,148名分 その他資料印刷費・配送運賃
	そ の 他	10,000	7,099	-2,901	H P 運営費
	事 業 費	1,180,000	500,000	-680,000	
	理学部支援事業費	700,000	300,000	-400,000	卒業祝賀会補助費(30万円)
	支部事業補助費	450,000	200,000	-250,000	2支部(数学、地質科学)に助成
	名簿編集費	10,000	0	-10,000	
	その他事業費	20,000	0	-20,000	
	負 担 金 等	500,000	488,715	-11,285	全学同窓会(賦課金30,000円)+(負担金500万円×9.1743%=4,587,150円)
	支 部 交 付 金	460,000	460,000	0	50,000円×6支部+首都圏支部160,000円=460,000円
	事 務 諸 経 費	123,000	104,547	-18,453	光熱水費、郵送料、払込手数料・料金、印刷費、消耗品 等
	事 務 局 費	560,000	530,000	-30,000	事務局人件費
	人 件 費	0	0	0	
	予 備 費	1,077,606	20,000	-1,057,606	退学者会費返金
	他会計(積立金特別会計)繰出金	0	0	0	
	支 出 合 計	6,235,606	4,346,832	-1,888,774	

積立金特別会計

特別会計	費 目	収 入	支 出	残 高	説 明
	2024年度までの積立額			21,000,348	定期預金(利息は一部を除き一般会計預金口座に振替)
	繰 入 金 ・ 繰 出 金	0	0	21,000,348	定期預金を整理した利息を一般会計雑収入に繰り入れ
	定期預金元金振替分の利息	9,530		21,009,878	その他の利息は一般会計雑収入に繰り入れ

表2

2026年度 理学部同窓会予算

一般会計

	費 目	前年度予算額(A)	今年度予算額(B)	比較(B-A)	説 明
収入の部	終 身 会 費 ・ 寄 付 金	5,000,000	5,000,000	0	
	終 身 会 費	4,000,000	4,000,000	0	新入生入学定員200名×20,000円
	特別会費・寄付金等	1,000,000	1,000,000	0	会員等からの特別会費及び寄附金等(目標額)
	他 会 計 繰 入 金	0	0	0	
	雑 収 入	88,817	100,000	11,183	利子、全学同窓会発送資料同封手数料交付金、支部補助精算金等
	繰 越 金	1,146,789	1,645,800	499,011	現金、第四北越銀行普通預金、ゆうちょ通常貯金、ゆうちょ振替貯金
	合 計	6,235,606	6,745,800	510,194	
支出の部	会 議 費	175,000	175,000	0	諸会議交通費、会場費等
	広 報 費	2,160,000	2,300,000	140,000	
	「会報」発行費用	400,000	420,000	20,000	理学部同窓会誌「会報27号」印刷代 前年度決算額を参考
	「理学部は今」発行費用	550,000	570,000	20,000	理学部機関誌「理学部は今」費用 前年度実績を参考
	会員宛資料配送費	1,200,000	1,300,000	100,000	会員宛会報などの郵送料・運賃等 運賃改定・会員増を勘案
	そ の 他	10,000	10,000	0	H P 運営費等(前年実績を参考)
	事 業 費	1,180,000	1,270,000	90,000	
	理学部支援事業費	700,000	800,000	100,000	卒業祝賀会補助費、ICNS2026学生補助費
	支部事業補助費	450,000	450,000	0	昨年度は2支部に補助
	名簿編集費	10,000	10,000	0	(名簿作成業務は外部に依頼)
	その他事業費	20,000	10,000	-10,000	
	負 担 金 等	500,000	500,000	0	全学同窓会賦課金 500万円×学部定員数で按分+定額30,000円
	支 部 交 付 金	460,000	460,000	0	50,000×6支部+首都圏支部160,000円
	事 務 諸 経 費	123,000	123,000	0	光熱水費、事務通信費、払込手数料・料金、印刷代、消耗品
	事 務 局 費	560,000	600,000	40,000	事務局人件費 前年度決算を参考
	人 件 費	0	0	0	後援会パートなし
	他会計(積立金特別会計)繰出金	0	0	0	昨年度積立実績はなし
	予 備 費	1,077,606	1,317,800	240,194	
	合 計	6,235,606	6,745,800	510,194	

積立金特別会計

特別会計	費 目	収 入	支 出	残 高	説 明
	2025年度までの積立額			21,009,878	定期預金(利息は一部を除き一般会計預金口座に振替)
	2026年度積立額	0	0	21,009,878	
	2026年度利 息	10,000	0	21,019,878	定期利息の内、定期元金に振替えられる分(前年並みを計上)

事務局より

1 理学部同窓会「代議員会」の開催
2026年6月20日(土) 駅南キャンパス「ときめいと」において代議員会が開催された。

- (1) 2025年度事業・決算報告(表1)・会計監査報告
・報告のとおり承認された。
- (2) 2026年度事業計画・予算案(表2)
・提案のとおり承認された。

2 2025年度事業報告

- (1) 総会を開催し、畠野弘通氏を新会長に選出するとともに、会則の改定を行った。
- (2) 広報活動については会報26号(担当：化学科支部)をはじめ、「理学部は今」55号を会員に送付した。また、卒業祝賀会への支援を行った。
- (3) 8月に令和7年版の名簿を発行した。
- (4) 全学同窓会との連携については、賦課金・分担金を負担するとともに各種会議に出席し、運営に協力した。
- (5) 後援会と連携し、2025度新入生より会費を徴収するとともに、例年どおり多くの方から特別会費としてご寄付をいただいた。

退職 物理学プログラム

小池 裕司 (教授)
在職期間：平成6年4月～令和8年3月
専門分野：ハドロン物理学理論
転出先：なし(定年退職)新潟大学名誉教授、学系フェロー

退職 化学プログラム

古川 和広 (教授)
在職期間：平成12年8月～令和8年3月
専門分野：分子細胞生化学
転出先：なし(定年退職)新潟大学名誉教授

退職 化学プログラム

佐藤 敬一 (准教授)
在職期間：平成3年4月～令和8年3月
専門分野：分析化学・錯体化学
転出先：なし(定年退職)

退職 地質科学プログラム

岩崎 俊介 (准教授)
在職期間：平成8年6月～令和8年3月
専門分野：植物生理学
転出先：なし(定年退職)

退職 自然環境科学プログラム

臼井 聡 (准教授)
在職期間：平成8年4月～令和8年3月
専門分野：有機化学
転出先：なし(定年退職)新潟大学学系フェロー

会報27号をお届けいたします。今号の編集は、物理学科支部が担当いたしました。ご多用の中、原稿をお寄せいただきました皆様方には、心から感謝申し上げます。また、原稿の依頼と収集を担当していただいた理学部同窓会事務局の皆様にも併せて感謝申し上げます。

なお、理学部同窓会のホームページには、各支部のバナーもありますので、お確かめください。

理学部同窓会
ホームページは
こちらから



住 所 〒950-2181
新潟市西区五十嵐 2 の町8050
新潟大学理学部内
T E L 025-262-6261
E-mail ridoso@ad.sc.niigata-u.ac.jp
U R L <http://www.ridoso.jp/>